

# 木工房 湯ノ里デスクの仕事

木工房 湯ノ里デスク 代表 田代 信太郎

URL <http://www.yunosato-desk.com>



## はじめに

湯ノ里デスク…という名前。  
少し変わった感じに聞こえるかも知れません。  
けれども意味は至ってシンプルで、字のごとく、机を  
中心にする工房…というつもりで名付けました。  
2002年に閉校した湯里（ゆのさと）小学校を舞台  
に、デスクを作る工房。つまりそれが、湯ノ里デスク  
なのです。



↑校舎の正面には、ヤマザクラとコブシ



↑大きな樹々に囲まれた、山間の校舎



↑「廃校から生まれてくる机」という物語性

## 工房立ち上げまでの経緯

工房は2002年の立ち上げから2015年現在に至るまで、代表である私、田代信太郎（1967年生まれ）と、佐々木武（1966年生まれ）の2名で運営しています。共に東京の出身で、最初に出会ったのは東川町にある家具メーカー。お互いに、北海道に憧れて移り住んだクチで、東京在住時には面識もなく、たまたま同じような時期に北海道へ、木工家具作りの世界へと入って来たのでした。

私は東京の高校を卒業後、都内の書店に就職。その後11年間に会社員として働きました。結婚をきっかけに北海道を訪れる機会が増え（妻が道産子だった）、移り住みたい！…という思いを募らせることに。それも都市部ではなく、田舎（地方）で暮らしたい。私たち夫婦の大好きな「温泉」が豊富にある土地で、美しい自然に囲まれて生活がしたい…。それこそが、脱サラした第一の動機でありました。

憧れの田舎暮らしをするために、木工の仕事を選んだのは、他に心当たりが無かった…というのが正直なところでした。インターネット黎明期の20年前、情報は雑誌で入手するくらいしかなく、「家具職人」というのは、その手の雑誌で時折目にする言葉だったのです。

脱サラ後、まずは飛騨高山の木工塾で2年間修行をしたのですが、初めて飛び込んだ木工の世界は、見るもの聞くもの初めてのことばかり。それまで会社員として積み上げた実績など関係ナシ。海拔0メートル地点から人生をやり直すような日々でした。みっちり基礎を学びながら、今後どのように自分の仕事を作っていくのか、懸命に考え続けた2年間でした。

そしてある時、これまでの「書店人」としてのキャリアを捨てるのではなく、むしろ生かし、進めさせ、木工と結びつけたらどうだろう？と思いついたのです。それが後に具体的となる、『読書インテリア』というコンセプトの起点でした。



↑ロングセラーとなった「自立式本立て」



↑本を愛する人のためのインテリアを形にする

飛騨高山から、いよいよ北海道へ。まずは東川町のメーカーに就職し、家具作りの経験を積みながら、独立開業のための場所探しに動きまわりました。資金が少なかつたこともあり、工房となる物件は、当初から借りることが前提。そして、借りるのであれば、ロマンの感じられる「校舎跡地」でと。

初志であった「温泉が豊富で、自然が美しい」土地、羊蹄山麓に狙いを定め、各町村の役場や教育委員会を訪ね歩きました。そして、幾重もの苦労の末に巡り会ったのが、ここ湯里小学校だったのです。美しい風景の中、大きな樹々に囲まれて立つ、素敵な小学校。まさに求めていた、理想の校舎でした。

ここまでは、自分一人で独立開業するつもりでプランを練り、準備を進めて来たのですが、場所が定まり、「校舎」という仕事場の規模を実感する中で、次第に協力者の必要性を感じるように。悩んだ末、職場で最も年齢の近かった佐々木さんに声をかけたのです。彼もやはり田舎暮らしに憧れ、似たような経緯で東京から北海道へと移り住んだ者同士。私がこれまでに考えてきた仕事のコンセプトやプランを詳しく話したところ、大いに共感を得ました。我々はさらに深く話し合い、共同で工房を設立する決意へと至ったのです。

こうして2002年春、ニセコ山麓の蘭越町。95年の校史に幕を下ろした湯里小学校を借り受け、私たち湯ノ里デスクはスタートしました。



↑左：田代信太郎(企画・デザイン・制作・営業)  
右：佐々木 武(制作・撮影)

### 企画の大切さと難しさ

- ・廃校から生まれる机…という物語性
- ・机を中心とした、小空間のためのアイテム展開
- ・「本のある暮らし」がテーマの『読書インテリア』

上記のようなコンセプトに基づく商品を開発し、営業を開始するのですが、先々で見当のズレを思い知ることになります。特に深刻だったのは、企画の柱である「机」という商材を売っていくことの難しさでした。たとえどんなに美しい無垢材で作っても、たとえ物語性の豊かな環境で生まれたモノでも、10数万円の机を買っていただくのは、並大抵ではありませんでした。

さらには、大手メーカーなどが有名デザイナーやプロデューサーと組み、優れた企画の無垢材デスクを打ち出してきたりして、ますます企画でも価格でも勝負が厳しい状況に…。木工では、「椅子」というテーマに挑戦する場合も大変苦勞するものですが、「机」をメインテーマにした私たちは、それゆえの難しい課題と向き合うことになったのです。

私たちは現在に至るまで、数々のトライ&エラーを繰り返して、見当ズレの補正に奔走しつつ、営業を続けて来ました。湯ノ里デスクとは何なのか、繰り返し、繰り返し自問しながら。



↑Think Desk & Hint Chair



↑ Little Tree

\* 本棚とコーヒーテーブルを組み合わせ  
「読書インテリア」の展開

——— 独自性を込めたモノ作り ———

ここまで「読書インテリア」というコンセプトを生かし、独自性を込めたモノ作りに取り組んで来ました。『ミニ書斎空間の演出』と申しましょうか、本立てやペン立て、小物入れや腕時計スタンドなど、ラインナップにはある種の統一性を持たせています。

家具インテリア全般で世界観を表現するのは、私たちほど小規模な工房では難しい。けれどもテーマを絞ることで、小さな湯ノ里デスク・ワールドを演出することができます。そして、明確なテーマを持って仕事に取り組んでいることは、プラスに作用する場合があります。特に小家具やクラフト小物などは、「書店」で扱っていただく機会も多く、独自の販路を開拓していると言えます。



↑ 函館 蔦屋書店（常設）



↑ 啓文堂書店 吉祥寺店／東京（常設）

商品を企画する時には、「なるほど！」と思えるような独自の発想を、必ずどこかに込めたい。デザインは、スッキリとシンプルに。仕上げは丁寧に美しく。木の表情や質感の良さが、手にとった人にスッと伝わるようでありたい。それが「湯ノ里デスク」という仕事の、大事な考え方、木工への取り組み方なのです。



↑ 本棚+テーブルの『Book Café』



↑ 文庫党に贈る、『文庫スタジオ』



↑腕時計のスタンド『時間よとまれ』

…これらだけではなく、普通のテーブルや本棚なども、受注制作で作っています。ご希望の寸法でお作りする受注制作の家具と、計画生産が出来る小物類。その2本立てで運営を続けているのです。

#### 販路について

校舎を利用しているので、教室や廊下が商品の展示スペースとなっています。こちらの工房ショールームでは、各種定番商品を販売しているのと、家具類のオーダーを受け付けています。ニセコ周辺は豪雪地帯なので、冬シーズンは工房への来客はゼロに等しいのですが、春～秋にかけては、そこそこの集客があります。また、ホームページを経由してのメールオーダーも、少数ながらあります。

クラフト品や小家具類は、主に委託商品として、いくつかのお店で扱ってもらっています。新千歳空港内のクラフトショップや、リゾートホテル内の売店の他、先に挙げた書店などでも販売しています。

#### 校舎利用、地域とのつながり

校舎を活用する利点はたくさんありますが、何と言っても、全てが屋内でまかなえる素晴らしさです。材料の保管と加工、塗装、事務、商品展示を部屋ごとに分けられて、雨にも雪にも濡れずに仕事ができる。まさに理想の木工環境です。反面、この大きな建物の維持・管理が大変ではあります。校内の清掃手入れはまだしも、外回り作業にかかる時間が半端ではありません。窓ふきも草刈りも、落ち葉掃きも除雪も…。しかし、その大変さを差し引いても、校舎の利用は魅力的なのです。

町から校舎を借り受けるためには、役場や教育委員会、さらには議会での承認が必要でした。けれど、最も大事なのは、その学校の地区の方々のお気持ち。大切な思い出がつまった学校ですから、土地の皆さんの理解をいただくことが重要です。幸い私たちは、温かく受け入れてもらうことが出来ました。そのような経緯がありますので、校舎は大切に、いつ誰が来られて

も、心地よく見ていただけるように心がけています。また、地区行事や葬儀のお手伝いなども、地区の一員として必ず出席しています。

町との係わりでは、公民館ホールの待合いベンチ、図書館のカウンターや椅子なども企画・制作しました。



↑体育館が工場。広い分、冬は寒い！



↑教室がショールームに

#### 「木」の魅力と、木工の今後

湯ノ里デスクではこれまで、ナラとウォルナットを主に使用して来ました。どちらも輸入材なのですが、その素材感に惚れ込んでしまっているのです。出来るだ

け使い続けたいと望んでいます。けれど、今後も輸入の広葉樹が安定的に入手出来るのか、不安があります。私たちが作っている商品のクオリティは、ディテールの丁寧な作りはもちろんです、素材の素晴らしさによって成り立っているのです。

仮に道産の針葉樹材で同じものを作ったとしたら、今の品質を打ち出すことはできないでしょう。しかし、高価な素材（ナラやウォルナット）を使って高品質のものを作るのは当然なのであって、現代を生きる私たち木工家は、「今の時代に使うべき素材」「地場産の素材」に向き合っていくことが、大事な使命なのかも知れません。

知恵を絞って地場の素材を生かし、かつ、人の心を豊かにするモノ作りが出来たなら、それこそが事業の真の成功と言えるでしょう。



私たちの工房を訪れるお客様の多くが、商品を手にとり、「木っていいですね」「木が好きなんです」とおっしゃいます。木が人を癒し、人の暮らしに親密に関わっていくのは、将来もきっと変わらないでしょう。その一助となるための仕事を、今後も続けていけるよう努力したいです。

今回、ウッディエイジ寄稿の機会をいただき、自分たちのこれからを考える、いいきっかけとなりました。ちょうどこの文章を書いている最中に、道産カラマツのCLT実用化に向けた記事を新聞で読みました。建築素材の分野において、価値ある成果が立ち上がろうとしていますね。

林産試験場におかれましては引き続き、家具・クラフト向け地場産材の研究と開発をお願いしたいです。研究会の見学参加などの機会がありましたら、ぜひ旭川にうかがいたいと思います。

私たちも知恵を絞りつつ、今後の課題として取り組んで参ります。